

旅人の木

TRAVELLER'S TREE



辻仁成



旅人の木

TRAVELLER'S TREE

辻仁成

旅人の木 たびと き

一九九二年一月一〇日 第一刷発行

著 者 辻 仁 成 つじ ひとなり

発 行 者 若 菜 正

発 行 所 株式会社 集英社

〒 東京都千代田区一ツ橋二一五 一〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六一〇〇

電 話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

製作課 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

7950-

旅人の木

仲睦まじく愛しあっていた両親が、ほぼ時を同じくして他界した時、僕の傍らに、兄の姿はなかった。

行方不明の兄のことは、葬儀の間中もずっと僕の頭の中を離れることはなかった。何度電話を掛けても通じることのない兄のアパートの電話は、いつも機械の声が事務的に、この電話はお客様の都合により止められています、とだけ繰り返した。

結局、兄のいないままに葬儀は終わり、両親の肉体は荼毘^{たび}に付され、信じられないほど小さな骨壺の中に納まった。両親の友人達や近県に住む親戚達が、各々兄について何か一言聞いたような目つきで、僕の前を通り過ぎていったが、誰一人としてその結んだ口を開くことはなかった。困ったものだ、あいつには。しかし、彼らの声にならぬ声は、僕の耳

にもちゃんと届いていた。

親の葬式に顔を出さない兄への憤りを、下腹にぐっと封じ込めて、人々は僕に深々とお辞儀をして帰っていった。僕は喪服に身を包んだ人々の黒い後姿を冷静に見送りながら、時間の坦々とした流れの中、両親の死を知らずにどこかで飄々と生きているだろう兄のことを考えていた。

九つ年上の兄とは、友達になることはなかった。友達になるには、年が離れ過ぎていて、兄の眼中には、子供過ぎる僕の存在など、割り込む余地はなかったに違いない。

しかし、僕の方とは言えば、年の離れた兄への憧れは強く、大人という存在を初めて意識したのも兄ならば、兄のしでかす行為はなんでも、多少大袈裟かもしれないが、僕の人生の指標となったのだ。

まだいっしょに暮らしていた頃の兄のあの風変わりな言動や、予測不能な行動は、兄の着るものや、兄の髪型や、兄の言葉遣いとともに、大人世界への入口だった。兄を発見し、兄を考察し、兄を理解することは、僕の残りの、ほとんど手つかずの人生に意味を与える重要な要因であった。まさに兄の存在は、親や学校の教師や、周りにいるどんな大人達よ

りもはるかにミステリアスで、魅力的であり、高校生の頃に読み耽ったグルニエやジッドのように、僕のそれまでの人生に意味を投げつけた最初の書物のようであった。

一メートル八十五センチはある兄は、彼が高校生になった時点で、町内一の背の高さと体格を有していた。ラグビーをしていた頃の兄は、学校でも目立つ存在で、人気者であったかどうかはわからないが、兄の名を出せば知らない者はいなかった。

「えー、ユウジの弟なんだ。」

初めて会った人達にそう言われることを、僕は心の底で、どんなに楽しんだことだろう。じろじろと、僕と兄とを比較するように眺める人達の視線を浴びながら、僕はそっと、細胞分裂を繰り返して、兄に近づこうと成長していたのかもしれない。

「あの子は、乳離れがとて早かったのよ。」

と、母はよく兄のことを話してくれた。兄の幼かった頃の話聞くのが好きだった僕は、いつもじっと耳を傾けて静かに聞いた。特に、兄が小学生だった頃の家出の話聞くのが好きだった。

兄は小学生になったあたりから、平気で家出をした。あの子には、家という概念が昔か

らなかったみたいなの、と母はしようがないと言わんばかりの複雑な微笑みを浮かべて話してくれた。兄は突然、何の前触れもなく、ふっと旅に出たらしい。一日、二日、帰らないこともあったという。最初の頃、父と母は氣も狂わんばかりだった。誘拐にあったのじゃないか、とか、事故に巻き込まれたのじゃないか、とか、社宅住まいだった当時の狭い家の中を、その度に警察や親戚が、あわただしく出入りしていたのだ。

その、家中ひっくり返って大騒ぎしている渦中へ、本人がまるで他人事のような顔をして、すっと帰って来るものだから、父も母も叱るに叱れず、涙を流しておろおろするばかりだった。いつもそんな具合に、氣の優しい両親は兄に振り回されていたのである。

僕が母にせがんで何度も聞かせてもらった兄の、もつとも長く、そして興味深い家出事件は、彼が小学校五年生の秋に起こした二週間に及ぶものであった。小学生がたった一人で二週間もの間旅をし、食い繋いだこの出来事は、マスコミにも取り上げられ、一時的ながらも世間を大いに騒がせた。北海道の長万部おしやましべで幕を閉じた彼の放浪生活は、家のある山梨県甲府から、どういう経路をへて、千キロも離れた北の街の長万部まで、兄が行くことができたのかという一点に人々の関心は集中した。兄は街を突き貫ける灰色の国道を、ふ

らふらと歩いているところを、地元の警官に補導されたのだが、その時の所持金は、わずかに五十円たらずで、もう何日もまともなものは食べていない有様だったという。保護した警官が尋ねると、認識番号を繰り返す捕虜のように、兄は何度も自宅の電話番号を繰り返した。何故、どうして、どうやってここまで、という質問には、ただ首を左右に振るばかりで、決して答えることはなかった。

次の日、朝一番の便で駆けつけた両親と再会した時も、取り乱す両親とは対照的に、兄は所在なげに大人達の足元を眺め続けていたのである。

その後も兄は、決して家出の動機や理由を明かそうとはしなかった。口を閉し、何かのタイミングを、じっと待っているようだった。兄が高校に進学する頃には、その放浪癖も、ピタッと止まっていた。父と母は、その原因を、兄の成長にあると考えて、保証のない幻の安心の中に浸かろうとしていた。大人になったんだよ、もう大丈夫さ。ある日、父が母にたいした根拠もなく、そう言っているのを僕は偶然聞いた。

でも僕にはわかっていて、あの頃兄は、完全に家を出ようと決意していたのだ。兄の目は、日ごとに鋭くなっていた。何かを追視する時の目は尋常ではなかった。あれは、決意

した者の目だった。兄が何を決意したのかはわからなかったが、そのために家を捨てようとしていることは、明らかだった。

僕にはそれがよくわかった。近くにいて、正確に、公平に兄を観察できたのは、僕一人だけだったからだ。僕は兄の観察者としての重要な第一歩を、あの頃、しっかりと踏み出していったように思う。

兄にとっての家や家族は、普通の、世間一般の人々の考える家や家族とは違っていたのではないだろうか？ 断言はできないが、どうも兄は家という集団を、軽視していたようなふしがある。あの当時、兄は家族のことを血の繋がった血族というふうには考えていなかった。たまたま同じ船に乗り合わせた旅行者ぐらいの感覚だったのだ。

実際僕は、兄がそう口にしたのを記憶している。

「世間では、俺とお前は兄弟ということになっているけどな……」

たまたま居合わせたリビングルームで、兄は突然話しかけてきた。西陽が室内を異常なほど赤く染めていた晩夏の夕刻だった。兄の顔はオレンジ色に発色し、それは怪奇映画のワンシーンのように、鮮明に僕の脳裏に残っている。

「それは、大きな間違いさ。……」

兄に語りかけられた光栄と、彼の語ろうとしている内容とが、一瞬のうちに頭の中の空白を埋めつくしてしまつて、僕は数秒、激しい動悸にみまわれた。兄の告白のような、あるいは学者が学会で発表する新説のような、その切り出しには、強い確信が漲っていた。僕は、まだ小学生だった僕は、リビングルームの古い大型の冷蔵庫の前で立ちつくし、表情ひとつ変えずに淡々と言葉を選んで語りかけてくる兄の、その予言者のような冷静な視線を、無防備に受け止めていたのだ。

「確かに、俺とお前は血が繋がっている。誰かが言うように、俺達はどこか顔も似ているよ。明らかに、同じDNAを共有しているんだから、まあ、外側は似てて当たり前さ。」

夕陽が兄の顔を溶かしていた。僕は椅子の背に手を置き、生唾を飲み込んだ。

「だけどな、遺伝学的には、俺達は兄弟だとしても、魂の部分では他人なんだ。わかるか。肉体はさ、仮の宿なんだよ。……」

当時、大学生になったばかりの兄が言う。その意味とやらを、小学生の僕は僕なりに必死に考えた。しかし、分かる理由がなかった。

僕が困惑した顔で、兄の細く切れ長の目を見つめ返していると、兄はしょうがない、と言わんばかりに肩をすくめ、ため息をひとつポツンとついた。

「輪廻だよ、つまり。」

兄の大人の声は、説得力に満ち、声変わり前の僕の子供の声を恥じさせた。

「リ、リンネ？」

「そう。覚えとけよ、お前にもきつと理解できる時が来るから。」

それから兄は、母がおつかいから帰って来るまでの十五分ほどの短い時間で、僕の考える輪廻について説いたのである。

「まず、肉体と魂は別のものだって考えてみな。肉体は地球と繋がるための舟なんだ。舟には使用期限があつて、それがつまり、死さ。……魂は死なないんだ。何度も何度も肉体を変えていくんだ。……それが、輪廻だよ。」

兄の声は低く、そして凜然と、僕の頭骨の内側で反響していた。

「例えば、前の世界では、俺がおやじを生んだ母親だったかもしれないし、お前とは、兄弟じゃなくて、恋人だったかもしれないんだ。いや、敵同士だったかもしれないな。……

おかしいか？　でも、これも現実さ。魂のレベルでは、そういうことが起きているのさ。今は男でも、前世は女だったり、今は黄色人種でも、前世は白人だったり、今は人間でも、前世は動物や昆虫の可能性もあるな。……」

いつ誰に、その輪廻を教えられたのかは分からないが、兄は間違いなくそれを信じていた。僕は笑うのを止めて、唇を結び直した。

「つまりさ。俺とお前は、肉体的には兄弟だけど、魂のレベルでは他人なんだよ。……たまたま乗り合わせた舟の客なのさ。」

その時、玄関の方から、ただいま、という母の甲高い声が聞こえてきて、兄は催眠術が解けた人のようにふっと顔つきを変え、リビングルームを出ていった。他人なんだよ、という兄のその一言は、それから暫くの間、僕の心の中に留まり、僕を苦しめることとなった。

僕が小学校の高学年の仲間入りを果した頃になると、当然のように、兄は家を離れた。金が無くなると昼間、母が一人のところを見はからって、こっそりと戻ってきてはいたらしいが、僕はあの頃を境に滅多に兄と会わなくなっていた。

兄は別の舟に乗ってどこかへ行ってしまったのかもしれないが、しかし兄の、他人なんだよ、という言葉だけは残った。僕の少年期は反抗どころの騒ぎではなく、兄に消された自分の存在を取り戻す毎日となった。図書館へ通い、兄が辿った道の後を追いかけてやったこともあった。様々な想念が、頭の中を飛び交い、死にたいと、弱音を吐いたこともあった。しかし、中学校に進学する頃になると、僕も、兄の言おうとしていたことの、一部が分かったような気がしたのだ。

そうだ。所詮、皆他人じゃないか。――

中学一年生の春、六、七年程前のことだが、僕はある瞬間、兄の提示したナゾナゾが解けたような気がした。

その時、たまたま金の無心に立ち寄った兄と、玄関先で出くわした僕は、何年ぶりの再会であったにも拘わらず、まるで昨日の続きのようななれなれしさで、もちろんナゾナゾが突然解けた解放感も手伝って、上気した勢いで、その背中へ向かって叫んだのである。「兄さん、俺分かったんだよ。俺達が他人だって言った、兄さんのあの一言の意味が。

……」

兄は、ぴたりと玄関の三和土^{たき}に立ちつくし、数秒の間をあけてから振り返ると、何だこいつ、というような侮蔑的な視線で僕をまじまじと見つめた。あの時、僕は何がいったい分かっていたのだろう。今になって思えば、それは恥ずかしいぐらいに不透明で霞^{かすみ}のようなものだったかもしれない。あの時のあのひらめきは、少なくとも今の僕にはもうない。「兄さんがよく家出した理由も分かったんだ。ほら、兄さんが小学生の頃、よく家を出てたじゃないか。あれは、魂のレベルで繋がっていた人々と、出会おうとしてたんだよ。……消されてしまった前世の記憶の糸をたどろうとしたんだろう。」

兄は何も言わずに出ていった。軽蔑するように出て行った。もうあの時の会話を覚えていなかったのかもしれない。突然わけのわからないことを言い出した弟に、憐れむでもなく、表情一つ変えずに出て行ってしまったのだ。僕は、ボタンと不快な音をたてて閉まったドアの内側に、再び取り残された。

あれから、更に月日は流れ、僕は大学の二年生になろうとしている。兄は、二十八歳になっただけだが、あの日以来、僕は兄の顔を見ていない。その時も、一分とか二分の遭遇だったため、兄の顔の細部まで把握することはできなかった。髪が伸びていたような

氣もするし、後ろで束ねられていたような氣もする。眼鏡を掛けていたような氣もするし、齒が欠けていたような氣もする。全ては曖昧な印象の向こう側に隠されたままだった。今、兄がどんな髪型をしているのかもわからず、どんなことを考えているのかもわからない。人間は変化する動物だと、誰かが本に書いていたが、兄の魂の変遷はどこまで進んでいるのだろうか？

二年に一度程の割りで、その時住んでいる所の連絡先と、仕送りのための銀行口座の番号を告げるために、電話を掛けてはきたが、それも事務的で短く、自分の要求がすむと、話したがる両親の会話をうまく躲^かわしてすぐに切ってしまった。

「困ったものだ、あいつには。」

父は今にも泣き出しそうな母の背中をじっと見つめ、半ばやけくそにそう呟いていた。兄から電話が掛かってきた日の夜は、いつも皆口数が少なく、視線を逸らすしかなかった。そして、次の連絡が来るまでの間、兄は再び音信不通の行方不明となったのである。